

## モントルーの飛行機雲

若い頃からほとんどメモをとったことはなかった。それで困らなかつた。報告などをまとめる段になると、一言一句、全ての記憶が新鮮に蘇よみがえるからだ。メモをとるとかえって忘れやすいなどとうそぶいていた。ところが、最近、糸口を見つければ、それを頼りに順繰りに思い出せることもあるけれど、いくら頑張ってもなかなか思い出せない事態に陥るようになった。しかも、その回数がだんだん増えている。今さら手帳でもないのです、そろそろパームコンピュータでも持ち歩かなければいけないと考えるようになっていいる。



つい先日、テレビを眺めていたら、晴れた日にはマンションの二八階のベランダからクッキリと特徴のある姿が見える筑波山。その山麓のパラグライダー練習場でパラグライダー二機が強風であおられて地面に叩きつけられ、死傷者が出たというニュースが流れた。その映像を見ていたら、急に数年前、遙か遠くにマッターホルンやモンブランなどアルプスを望む山頂付近でハンダグライダーが優雅に飛遊していた光景を思い出した。

かつては仕事で欧州に結構出かけた。パリには国際会議などのため通算すると半年以上も滞在した。だが、東欧はもちろんのこと北欧も、そしてオーストリア、スイス、スペイン、ポルトガル、ギリシアにも行ったことがなかった。要するに



行ったことがない国が大半だった。なかでもスイスは国際会議が開かれることが多いはずなのに、行ったことがなかったことが不思議なのだが、ともかく機会がなかった。

それで、数年前のことだけれど、スイス行きの話が出た時には、普通は気にする体調のことはまったく考えなかった。晩秋で寒いに違いないとは思ったけれども躊躇<sup>ちゆうちよ</sup>はしなかった。ともかく、昔、飛行機でアルプス越える際に雲の切れ目に見たことのある、おとぎ話に出てくるような街に一刻も早く降り立ちたいと思った。



二〇〇一年十月下旬、パリ経由でジュネーブ(Geneve)に入った。小雨降る夕暮れの中、パリ・シャルルドゴール空港に着いた。予想通り気が滅入る天候だったけれど、久しぶりのことで、改めて洒落<sup>しやれ</sup>た建築に圧倒され、キョロキョロしながらジュネーブ行きの機に乗り換えた。仕事で行く<sup>ぶしやう</sup>のだから当然なのだろうけれど、相変わらぬ無精。初めて行く所なのに何も調べなかった。現地に詳しいMさんと二人旅、どうにでもなるだ

ろうと最初から決め込んでいた。ジュネーブ行きエアバスの中で、ようやく旅行社からもらったスイスのパンフレットに目を通す気分になった。



そしてスイスとは言っても、ジュネーブはフランスの中に入り込んだ「亀のしっぽ」の先に位置する都市だということを知った。

ジュネーブ、チューリッヒ、ベルン、バーゼルなどの都市は歴史上も有名だし、レマン湖とかマッターホルンやユングフラウなどの山の名前も雑誌などによく登場する。だから知っているつもりになっていたものの、その地理的關係となるとまったくあやふやだった。

「まいったなあ」と思っている間に、夕暮れのジュネーブ空港に到着した。ジュネーブ空港にはフランスとスイス、二つの入国ゲートがあった。国境沿いにあるとは聞かされてはいたものの、これには驚かされた。Mさんの後に続いてスイス側の出口に向かう。

そして初めてスイスの地を踏んだ。地面は濡れていた。ちよつと雨が降ったらしい。しかし、すでに止んでおり、思ったほど寒くはない。



タクシーに乗り込む。ほどなくレマン湖畔にあるMさん推奨のホテル・ボー・リヴァージュ (Hotel Beau Rivage) に着いた。小さいけれど伝統と格式を誇るホテルと書かれていた通りのホテルだ。コンシェルジュ (conciierge) がMさんの顔を見て、満面に笑みを浮かべた。真つ赤な頬がこぼれ落ちた。

Mさんは綺麗なキングス・イングリッシュで自分の名前を言い、会えて嬉しいと丁寧に挨拶する。彼は<sup>おおげさ</sup>大袈裟な身振り手振り、待っていましたと迎える。僕は恥ずかしくなり、少し離れたところで、二人のやり取りをポカンと眺めていた。

昔、泊まったとき世話になり、やや多めにチップをはずんだことがある。以来、妙に仲良くなった。部屋もグレードの高いところを用意してくれる。訝<sup>いぶか</sup>る僕の様子を察知し、Mさんは部屋に案内されるエレベータの中で、いつもの調子で懇切丁寧に、そして、やや得意げに、嬉しく堪<sup>たま</sup>らないという雰囲気で種明かしをした。



落ち着いて格調高い風格のある部屋だった。眺めも素晴らしい。目の前に広がるレマン湖。対岸にはアルプスを背景にフランスの瀟<sup>しょうしや</sup>洒な街並みとヨット・ハーバーがたたずむ。日が暮れる前の一瞬、雲が消えて、はるか遠くに写真で記憶のあるモンブラン<sup>いただき</sup> (Mont Blanc) の頂が見えた。黄昏<sup>たそがれ</sup>の中で光輝いていた。





日が暮れると、急に肌寒くなってきた。諦<sup>あきら</sup>め窓を閉める。対岸の街の明かりが湖面に映えて宝石のように光る。名物の大噴水がライトアップされて浮かび上がる。安堵感を覚えると同じ時に十数時間も飛行機に乗って、ついにスイスに來たのだという感慨に襲われた。一連の公式訪問などがあるのだから背広と白のワイシャツとネクタイは必携だと念を押され、いつもと比べて重い荷物を持ってきたけれど、その甲斐<sup>か</sup>はあったと思った。

しかし、身体を騙<sup>だま</sup>すことはできない。このところ持病のようになっていけれど、歯が浮いて疼<sup>うず</sup>き始めてしまった。薬屋に飛び込んで、鎮痛剤を買い求め、それで誤魔化<sup>ごま</sup>しながら、公式訪問や打ち合わせの合間にはひたすらジュネーブの街を歩き回った。食べ物や飲み物は歯の痛みもあって、今ひとつだったけれど、他は何もかもが新鮮だった。



実はジュネーブに着いたのが土曜日で、翌日の日曜日は小春日和だったことも手伝って、列車で小一時間のところにあるレマン湖畔のモン

トルー(Montreux)に行くことに即決した。夏に有名な「ジャズ・フェスティバル」が開かれるところである。車窓からは進行方向に向かって右手はレマン湖、左手はブドウ畑の山麓が延々と続く。



それにピニオン（小齒車）をかみ合わせて走行するものだ。

動き出したとたんに気分は「エーデルワイス」からイタリア民謡の「フニクラ」になった。齒車をかみ合わせて動くのだから騒音がひどい。それをうるさいとは思わず、楽しい賑やかさに感じるのだからいい加減なものだ。いい気分になって、心の中で口ずさむ。

赤く火を噴くあの山へ 登ろう登ろう

そこは地獄の釜の中 のぞこう のぞこう

登山電車が出来たので 誰でも登れる

流れる煙は招くよ みんなを みんなを

行こう行こう 火の山へ

行こう行こう 山の上

フニクリフニクラ フニクリフニクラ

誰も乗る フニクリフニクラ

何十年も歌ったことのない歌詞を呟っていた。



傾斜地をうまく使って建てられたおとぎの世界に出てくるような家々の間をぬって登山電車は走る。民宿のようなものもある。どの家の窓も庭も色鮮やかな花で飾られている。家の庭が駅になっている。そこで結構、人が降り降りし、荷物がやりとりされる。生活手段になっている。さらに登ると風景は一変する。美しい木々の茂る山間を走り抜けると、わずかな草と岩だけの世界だった。登ってきたレールがはるか真下に、くねくねとどこまでもつながっている。眼下には広大なレマン湖、遠くには新雪が眩しいアルプスの山々が飛び込んでくる。





終点で降りた。身体に鞭打って展望台までの悪路を登った。休み休みで、何とかたどり着いた。フランス側のモンブラン、マッターホルンからスイスのユングフラウまで三六〇度が一望できた。抜けるような青空と輝く新雪。感嘆詞しか出てこなかった。



登るのに汗ばんだため意識しなかったけれど、外気はかなり冷えている。急に寒さを覚えた。周囲の人は、それなりの服装をしている。場違いなのはMさんと僕の二人だけ。名残惜なごりおしかったけれど、戻ることにした。

下りは楽だった。周囲の景色を眺める余裕がある。空気を切る音を立てて、頭上をパラグライダーが飛び去る。そして谷から吹き上げる空気の流れに乗って、鳶とんびのように軽快にアルプスの山々を背景に黄色の翼が青空の中で漂い始めた。





気流の状態が良いのだろう。右に左に、上に下に、自由自在に飛び回る。まるでエンジンが付いているようだ。いくら眺めていても降りる気配が感じられない。昔、箱根でもパラグライダーが飛んでいたのを見たけれど、別物のように思えた。

麓のモントルーに戻ると暖かだった。まだ十分に時間に余裕がある。夏には観光客でごった返すという街も静かで気持ちがいい。ファーストフードを頬張りながら、レマン湖畔でのんびりすることにした。「ジャズ・フェスティバル」の会場になるという場所も人影はまばらである。ベンチで日光浴をしている老人。ヘッドホンで音楽を聴きながらジョギングする人。ローラーブレードを楽しむ子供。赤ん坊を乳母車に乗せて散歩するカップル。湖畔の公園は、休日を楽しむ地元の人たちだけのようだった。





湖畔に立つと、遠くに湖の中に建てられているという美しい古城、シロン城が見えた。良いところだよとMさん。しかし、もうそこまで出かける気力はない。それよりも鳥でも観察しながらのんびりしたかった。夕暮れはきつと素晴らしいに違いないと思った。

予想に違たがわず夕暮れは見事だった。空には飛行機雲が金色に輝く。エンジンの排気ガス中の水蒸気が急冷されて雲になるというヤツだ。それが一本や二本ではない。次から次と現れる。

スイス上空はたくさん航空路が交差するのだから、考えて見れば当然のことだけれど、その美しさに見入った。

「あつ、今度は右からだ」

「左からも来た」

「真上にもあるぞ」

子供時代のように夢中になって見つけた数を競い合う。

突然、学生時代に流行ったアルバート・ハモンドの「カリフォルニアの青い空」の曲とその中の歌詞「It never rains in southern California」が浮かんできた。

「モントルーの空に飛行機雲の見えないときはない」ということか。くだらないことを口にしては喜んだ。たった半日あまりのモントルーだったけれど、今でも鮮明に記憶に残っている。